音　韻（史的研究）

沼本克明

1. 研究の動向

従来の展望の枠組みに従い，「史的研究」を，現代語を除いた広く過去の言語の音韻・音価を主題とした研究とする。橋本進吉博士が本格的な日本語の音韻史研究に先鞭を付けられて以後，長い間音韻史研究の分野は国語学研究の中心を占めてきたと言えるが，近時主流が史的研究からあらゆる分野で現代語に移った事は誰もが実感する所である。史的研究，特に音韻関係のそれが成熟期に至った――象徴的に云えば，史料による新しい事実の指摘（記述）がほぼ行き渡った――という研究者総体の認識が背景に有ることは否定できないと思う。従ってこの項に属する論文生産数そのものは減少の傾向にあるように思われる。今試みにそういう流れを数値として把握する為に『国語年鑑』に「音韻史」「アクセント史」として採録されている著書・論文を昭和51～55年の五年間と平成6～10年間とを比較して見ると次の様になる。

昭和51年	著書2	論文18	アクセント史等3	計23
昭和52年	著書1	論文33	アクセント史等2	計36
昭和53年	著書2	論文35	アクセント史等1	計38
昭和54年	著書2	論文36	アクセント史等0	計38
昭和55年	著書2	論文24	アクセント史等4	計30
平成　6年	著書2	論文14	アクセント史等1	計17
平成　7年	著書7	論文11	アクセント史等5	計23
平成　8年	著書3	論文11	アクセント史等3	計17
平成　9年	著書5	論文　8	アクセント史等3	計16
平成10年	著書2	論文14	アクセント史等3	計19

これは極粗い統計ではあるが，大凡の論文の生産傾向は把握できるであろう。著書については著者の集大成的なものが有るので別にすると，論文は20年前の5年間146本，最近5年間58本で，3分の1の生産量しかない事が明瞭である。

因みに平成10・11年度の音韻史関係の著書としては次の様なものが出版された。

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊『日本語アクセント史総合資料　研究篇』（東京堂出版，1998.2）は先の資料編に基づきその具体的研究を披瀝したもので新たに「早稲田語類」を提案し，アクセント史研究は新局面に入ったと言いうる。秋永一枝『東京弁アクセントの変容』（笠間書院，1999.3）は既発表論文の集大成されたもの。山口幸洋『日本語方言一型アクセントの研究』（1998.10）は，一型アクセントに関する山口の既発表論文を集成したものであるが，一型アクセントを日本語アクセントの原形と見る論が収められている。多和田眞一郎『沖縄語漢字資料の研究』（渓水社，1998.2）は「琉球館訳語」等9種の漢字資料の音訳字を整理したもので本格的な研究の基礎ができたことになる。岸田武夫『国語音韻変化論』（武蔵野書院，1998.5）はその長年に亘る音韻史関係の遺稿集である。馬渕和夫『古代日本語の姿』（武蔵野書院，1999.1）も幅広い研究の集大成で，「音韻篇」として音韻関係の既発表論文8篇と日本語と朝鮮語との関係論文が収載されている。

平成10•11年の2年間に発表された単行論文について，以下，従来の分類に従いつつ管見の及んだ範囲で紹介と概観を試みる事とする。なお，取り上げる順序は概ね扱ったテーマの時代順とする。

2.　日本語の音韻史一般

字余りを通して上代語の音韻研究を進めてきた毛利正守には今期にも「古代日本語の音節構造の把握に向けて」（『万葉集の世界とその展開』白帝社，1998.4），同「古代日本語に於ける字余り・脱落を論じて音節構造に及ぶ――万葉（和歌）と宣命を通して――」（『国語と国文学』75-5，1998.5）が有り，更に平安時代に連続させた，同「古今集における母音の在りよう」（『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』，1999.6）が有った。最初の論は，「～アリ」と「ナリ・タリ・ザリ・カリ」の記紀歌謡・万葉・宣命での分布情況を手掛かりにして，記紀歌謡と万葉B群（説明省略）と宣命とが同等の在りようである事を確認し，そこから，散文（宣命）にも，毛利が年来主張して来た字余り即ち単語連続・単語結合体の存在を認めようとするものである。韻文である万葉集の，B群の捉え方は毛利自身でも揺れて来たようであるが，本論でも尚「（韻文と散文という異質の文体の）同等の在りよう」が上記の主張の根拠として有効性を持っているかどうか問題として残っていそうである。次の論は上記論文とほぼ重なるので省略するが，これらはその題目から知られるように従来韻文中心で論じられてきた上代語の音節構造を散文を含めて統合的に究明しようとする基礎作業であり，今後の行方を期待したい。

上代語の音韻脱落については，別に一連の研究として，権景愛「上代日本語の母音脱落とアクセント――融合標示の手段としての両者の相関性――」（筑波大学『日本語と日本文学』28，1999.3），同「上代日本語における母音脱落――音数律との関連に着目して――」（『国語学』197，1999.6），同「上代日本語における音節脱落」（『筑波日本語研究』4，1999.10）の3論文が有

った。初めの論は，複合語の接合部についてのアクセントとの相関につき，先項末尾音節と後項冒頭音節のアクセントの高さが同じ場合は脱落が起こりやすく，異なる場合は脱落しにくいという事実――相関性――を指摘した上で，その意味づけとして，形態素の癒着指標としての母音脱落はアクセントの上でも一纏りと認識出来る複合語において実現されやすかったと論じている。併せて，平安時代以後に脱落形の多くがもとの非脱落形に回帰する事象につき，母音脱落による形態素癒着表示の限界性がこの回帰を促す要因になったと説く。2番目の論は，韻文・散文（及び口頭語）という韻律制約の有無が複合の際の母音脱落に大きく関与し，文体差を重視する必要を主張したもので，韻文においては音数律の調整が脱落・非脱落の選択を決定すると指摘している。前記毛利の韻文と散文を連続的に捉えようとする方向と論が分かれる。尚，権の方向で考えようとする時，論者自身も述べているように，脱落に依る音数律の調整は選択肢の一つで，多数の非脱落形定数超過句の存在理由の解明が残されている。3番目の論は，同音節（カハハラ〉カハラ）と形態素内（オノレ〉オレ）において発生した脱落形は，実際に音節が脱落した可能性が高いもので，本来のアクセントを保存している傾向が見られると指摘し，そこから発展する解釈を提示したものである。共に更に発展しそうな犀利な論文である。更に，佐野宏「母音脱落現象と語構成」（『国語学』199，1999.12）も上代語の母音脱落を対象としたもので，岸田武夫，川端善明，山口佳紀，柳田征司氏らによって漸次整理されて来た脱落条件をより単純化して把握しようとする試みである。ユクトイフ〉ユクチフは脱落条件①（説明省略）に不適合の例であるが，別にイカニイフ〉イカニフという脱落条件⑤により成立したものへの形態類推によって生じたとして説明でき，斯くしてニフの如き例外処理の為に設けられた条件一項は削除できるとする。そこから，上代語の母音脱落現象は脱落条件による脱落と形態類推による脱落の二種類が存在したという主張になる。首肯できる論である。武井睦雄「古代日本語における母音の連続――［付］字音語の一般的な受容の時期について――」（『国語と国文学』76-8，1999.8）は，上代語における連母音の回避は「傾向という程度に留まり，法則の如きものとはなっていない」という事実を連母音の許容されている文献上の用例を挙げながら警告したもの。併せて上代に字音語の用いられることが極めて少なかったとは言い難く，そこに含まれる母音の連続する形も少なからず用いられていたというのが副題の謂いである。上代語の脱落についてはこの他にも，松村信美「上代語の約音」（『中京大学文学部紀要』33-1，1998.7）が有った。

上代特殊仮名遣や万葉仮名の音価などに関する論として，安本美典「上代特殊仮名遣いと後置定冠詞」（『言語』27-7，1998.7）は，未だ定説を見ない上代特殊仮名遣のエ列乙類音・イ列乙類音を発生させたa＋i・u＋iのiを後置定冠詞と見ようとする論である。馬渕和夫「野はノかヌか　憶良の用字「農」を巡って」（『万葉』196，1998.7）は先引同氏著書に書き下ろされた論文を改稿されたもの。石塚龍麿が所属を誤り，橋本進吉によって修正されたヌとノ甲・ノ乙の区別は実際の上代文献では複雑な様相を呈する。この問

題につき，古代日本語が多様な様相を持っていた――土着と渡来――という仮説の上に，土着の人々はウとオ甲の区別を持っていたが，書記する人々にはその区別が無かったために両者の書き分けを無くしてしまったという考えで説明しようとする。音韻資料としての上代文献の限界性に問題を投げかけている。早田輝洋「特集 音節とモーラの理論 上代日本語の音節構造とオ列甲乙の別」（『音声研究』2-1，1998.4）は，上代日本語のオ列甲乙の書分けを音素の違いと認めない松本克己説を対象としながら，音素の違いと見る立場から，かつて服部四郎が提出した日本祖語・奈良時代語に母音の弁別的長短の対立の存在を認める説を援用して統一的説明を試みたものである。上記と同一特集号掲載の，木田章義「特集 音節とモーラの理論　音節とモーラ」（『音声研究』2-1，1998.4）は国語学会のシンポジウムの議論を受けたもので，古代日本語の音節構造がモーラかシラビームかという問題について同氏の主張――一貫して日本語はモーラであったものとして解釈できる――の念押しをしたものである。

音韻の通史を扱ったものに，小倉肇「サ行子音の歴史」（『国語学』195，1998.12）が有った。サ行子音は難問の一つで定説と言えるものがない。亀井孝の推定音価の検証という方法でその歴史を再構したもので，関連の問題が包括的に説明されていて無理のない論の印象を受けた。林史典「音韻資料としての円仁『在唐記』」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院，1998.2）は，平安初期語の音韻資料として重視されてきた当該資料は，その資料的性格に必要な吟味が加えられないで利用されてきたという批判的視点に立って，改めて詳細な吟味を加え，当時の日本語のハ・サが［pa］［tsa］であった蓋然性が高いと指摘している。因みに同じ様な視点で当該資料の音注の再検討を行った労作に，竹内信夫「揚州および長安における円仁の悉曇学習――特に宝月「シッダン字母」をめぐって――」（『東京大学教養学部紀要・比較文化研究』33，1995.3）が有ることを指摘しておきたい。

中・近世語対象の論文に移ると，遠藤邦基「促音・入声音の「ンツ（ンチ）表記」――二字で表記することの意味――」（『国語国文』67-12，1998.12）は，中世以後，促音は「ツ」，撥音は「ン」の表記が定着するが，資料によってはその両者の表記に揺れが存するという実態の中で，「ンツ」のように両表記が重ねて出現する事象の指摘とその解釈を提示したもので，十六世紀半ばころまで存在していた鼻的破裂音の音声表記であったことを論証している。遠藤には「連声の表現効果　促音型連声はなぜ少ないか」（関西大学『国文学』77，1998.3）も有った。動詞・形容詞の音韻との絡み合いについて論じたものに，岸本恵実「ハ行四段動詞アウの発音」（『国語国文』67-8，1998.8），来田隆「ヒキイからヒクイへ」（『国語語彙史の研究』18，1999.3）が有る。前者は，ハ行四段動詞の「-au」形はハ行転呼音形が非知識層の口語に引き継がれたもので，長音化を経て再び回帰したものではないという新しい解釈を提出している。キリシタン資料の資料性の再検討にも問題を投げかけた。後者は語幹イ列音形容詞の消滅につき，先行説の修正として，連用形の音便形が拗長音

になり，ク活用形容詞の例外となることを避けた為という体系性に求める論である。呉美寧「『日葡辞書』のオ段長音開合表記の混乱について」（北海道大学『国語国文研究』111，1999.3）は日葡辞書のオ段長音開合の混乱例を多角的に詳細に検討したものである。近世語の音韻音声史料が拡大され，より精密な記述の道を開くことになった肥爪周二「近世末期音韻学者の江戸語母音観察――悉曇学・蘭語学・国学・韻鏡学の交渉――」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』，1998.2）も有った。井上史雄「特集：近代語から現代語へ　近代の言語変化――音声資料の活用――」（『日本語学』17-6，1998.5）は，当該100年間の音声史料として録音資料が有効であることを指摘している。福島直恭「連接母音aiの長母音化に関する社会言語学的一考察」（『国語学』196，1999.3）は，今後の日本語史研究が如何にあるべきかについての『国語学』の特集号に応えたもので，資料と事象を江戸語のai連母音に設定し，その分析を通して日本語史研究の意義・方法を提示した教えられる所の多い好論である。ただ「言語的条件」の設定に経験則優先の嫌いが無くもない。同じ号に掲載された，こまつひでお「日本語進化のメカニズム」（『国語学』196，1999.3）は音韻史を包括した，言語史研究の在り方を提示しており，同じ著者による『日本語はなぜ変化するか』（笠間書院，1999.1）と共に必読の論である。

沖縄方言を問題にする柳田征司「「おもろさうし」に見える，本土方言イ段音に対応するエ段音――沖縄方言の史的位置に関する有坂・服部説を検討するために――」（『ことばから人間を』昭和堂，1998.6），同「沖縄方言における「木」を表す「コ～」」（『国語語彙史の研究』18，1999.3），同「沖縄方言の史的位置（上）（下）――「キ̀」（木）「ウキ̀」（起き）「ウリ̀」（降り）などの問題――」（『国語国文』68-4・5，1999.4・5）は，先年来日本語音韻史の統合的な把握に向けて精力的に展開されている論の中でも重要な位置にある沖縄方言の成立に関する論――即ち沖縄方言は有坂・服部説の如く古い時代に別れたものではない――の駄目押しをされようとした諸論文であり，これらの諸論文に対する沖縄方言の専門家の意見が欲しい所である。小林芳規「沖縄県の角筆文献」（『汲古』33，1998.6）は，角筆文献の江戸時代沖縄方言資料としての活用の道を開いた。次期に入るが小林には「角筆文献に基づく「近世の方言地図〔音韻篇〕」作成の構想」（『角筆文献目録1999年版』2000.3）がある。

安部清哉「日本語史と方言研究との接点　東西方言の諸相と日本語史の課題」（『日本語学』18-5，1999.5），大野眞男「日本語史と方言研究との接点　日本語音韻史における琉球宮古方言――高母音化と連母音融合をめぐる問題を中心に――」（『日本語学』18-5，1999.5）は，日本語史研究の現状や問題点・課題が方言研究との接点で包括的・総合的に良く整理されて提示されており有意義である。

3．アクセント

アクセント研究は今期も盛んであったといえる。

アクセント史研究の基礎になる節博士・声点の基本的な問題につき，川上蓁「日本伝

統音調表記の静と動」（『国語学』197，1999.6）は，古来一貫した用法であったのではなく，高・低という段階に引き当てて記述した静的なものから声の高さの動き・方向を記述する動的なものへと発展したことを補忘記・名目抄を例に引きつつ説いている。

アクセントが極めて体系的に変遷することを手がかりに方言史を含めた日本語史を再考する試みがいろいろとなされている。その際の基本的な考え方は，名義抄式アクセント体系を基準に前後に投影させて歴史的変遷を考えるやり方で，この方向の研究として前期に引き続き，松森晶子にその自説をわかりやすく説いた「日本祖語のアクセント」（『日本語学』17-4，1998.3），同「琉球アクセントの歴史的形成過程――類別語彙2拍語の特異な合流の仕方を手がかりに――」（『言語研究』114，1998.12）が有った。また，木部暢子にも「日本語史と方言研究との接点　薩摩方言とアクセント史」（『日本語学』18-5，1999.5），同「屋久島アクセント再考」（『国語国文』68-11，1999.11）が有り，先年再構したゴンザ式アクセントを手がかりにして，名義抄式アクセントから九州方言アクセントの成立過程に新説を提示した。これらに対して，山口幸洋「特集：アクセント研究の現在　日本語一型アクセントの特質――もう一つの原始日本語――」（『日本語学』17-4，1998.3）は，日本祖語のアクセントを，現在の方言アクセントの周圏論的分布などを手掛かりに，一型アクセントであったと措定し，それが複雑化して日本語アクセントの種々相が成立したと説く，問題提起の論である。氏には先に紹介した関連する著書もある。早田輝洋「平安時代京畿方言の音調」（『大東文化大学紀要』36，1998.3）は，前期でも紹介のあった氏自身の非線形モデルによる論を改訂したものである。

一方従来から行われてきた緻密な個別資料の記述研究や解釈も着実に積み重ねられており，石川聡実「『高松宮御蔵河内本源氏物語』に差された声点の性格」（『国語国文』67-4，1998.4），坂本清恵「世阿弥自筆能本から見たアクセント体系変化の時期について」（早稲田大学『国文学研究』128，1999.6），上野和昭「中世後期以降の四拍動詞アクセント体系についての史的考察」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43-3，1998.2），同「特殊形アクセントの問題点」（早稲田大学『国文学研究』128，1999.6）などが有った。

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊「特集：アクセント研究の現在　アクセント史研究の新展開」（『日本語学』17-4，1998.3）は，秋永氏を中心として公刊されたアクセント史資料についての理解を深める為に有意義である。同様な論文に，秋永一枝「アクセント資料集利用の問題点」（『文学・語学』158，1998.10）も有った。

4．字音等

日本漢字音関係の論文は比較的毎年継続して発表され安定した分野と言えよう。個々の字音基礎資料の提示，新しい事実の指摘，或いは新しい解釈の類が見られた。

白藤禮幸「平安時代初期の字音注について」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』1998.2）は平安時代初期の字音表記を整理し，その字音が日本語音韻体系の範囲内に収ま

るものである事を論じたものである。この指摘に乗って云えば，平安中期に入って字音の把握が俄に原音に忠実になっていくのは何故かという問題が設定出来るであろう。佐々木勇「醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』の声点加点について――前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈――」(『訓点語と訓点資料』103，1999.9) は，字音（漢音）の記述が原音に忠実に行われようとした日本側での典型的な資料である当該資料を改めて取り上げて論じたもの。著名な資料で諸家が取り上げたが，何れもはっきりしなかった表紙紙背の中段「濁平聲字形輕重/濁上入聲字重輕/從本清字但随出來」の解釈が確定された。佐々木には，この他に「三重県専修寺蔵「三帖和讃」における字音の連濁」(『広島大学学校教育学部紀要』2-20，1998.1)，「日本漢音における軽声の消滅について――漢籍を資料として――」(『鎌倉時代語研究』21，1998.5) が有る。前者は当該資料の連濁現象を分析したもの，後者は漢音の六声体系における平・入声軽重の区別の消滅の過程を探ったものである。原裕「東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』字音点分韻表」(『訓点語と訓点資料』101，1998.9)，李京哲「東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』の分韻表」(『鎌倉時代語研究』22，1999.5)」は，先年東京大学国語研究室資料叢書として公刊された標記の漢音資料を分韻表として整理したもので，前者はその字音仮名を取り上げ，後者は声点のみのものも取り上げてあり，両者補って今後の利用が期待される。原裕「東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』仮名字音点」(『中央大学国文』41，1998.3) はそれによって当該資料の漢音の特徴を整理したもの。原裕には，この他に「「御堂関白記」自筆本の誤記例から見た11世紀初頭の日常字音」(『中央大学大学院研究年報　文学研究科篇』27，1998.2) が有る。李京哲「日本漢音に於ける梗摂の字音形を巡って――孔雀経諸本を中心に――」(第81回訓点語学会，1999.10.29 於名古屋大学) は口頭発表であるが，孔雀経の漢音に中国唐代原音の喉内韻尾の口蓋化が反映していることを指摘したものである。この中国唐代原音の喉内韻尾の口蓋化進行過程については，平山久雄「隋唐音系里的唇化舌根音韻尾和硬腭音韻尾」(北京大学中文系『語言学論叢』20，1998.2) という重要な論文が発表せられている。ここで序でに，日本漢字音の源流としての中国漢字音関係についての論文を見ると以下のような岡本勲の精力的な研究があった。岡本勲「切韻の音韻体系と呉方言」(中京大学『中京国文学』17，1998.3)，同「切韻の性格とその音韻体系」(『中京大学文学部紀要』32-3・4，1998.3)，同「字音研究と声訓」(『中京大学文学部紀要』33-1，1998.7)，同「唐代方言の声調」(『中京大学文学部紀要』33-3・4，1999.3)，同「切韻の分韻と現実の音韻」(『中京大学文学部紀要』34-1，1999.7)，同「切韻編纂とその先行韻書」(中京大学『中京国文学』18，1999.3)。個々の漢字音資料の整備と分析を行ったものとしては，榎木久薫「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経　加点字翻刻並に分韻表」(『鎌倉時代語研究』21，1998.5)，柏谷嘉弘「正応二年本白氏文集巻四の漢字音」(『神戸女子大学文学部紀要』31，1998.3)，同「白氏文集の音注」(『神戸女子大国文』9，1998.3) があった。

声明資料を漢字音研究に利用しようとしたものに，浅田健太朗「声明資料における「ず

らし表記」の機能を巡って」（『訓点語と訓点資料』101，1998.9），同「声明資料における補助記号「火」について――音楽譜における言語事象の現れの一例として――」（『鎌倉時代語研究』22，1999.5）が有った。金田一春彦，桜井茂治等によって真言声明をアクセント資料とした研究が大きな成果を上げたが，字音資料としての活用は余り見られない。浅田の研究についてみると，入声韻尾の中，-t 入声のみでなく-k 入声も鎌倉時代の声明では残っていたというような事実も浮かび上がってくる。今後の詳細な研究が待たれる。

江戸時代は漢字音が韻書・韻図で処理されて行った時代である。この様な規範的立場から漢字音を規定していく潮流がどのようにして形成されたか，学史的問題として追究しようとしたものに，中澤信幸「日遠の「広狭」」（『名古屋大学国語国文学』83，1998.12），同「一七世紀初頭における『古今韻会挙要』の受容――日遠『法華経随音句』を中心に――」（『愛文』34，1999.3），同「江戸時代における『広韻』受容の変遷――沢存堂本はいつごろ流布したか――」（『名古屋大学国語国文学』85，1999.12）が有った。

「日本韻学」という立場から見ると，漢語音韻学と梵語音韻学とが相互に関与し合って発達した。この関与の在り方を追究する課題が残っていると言えようが，肥爪周二の「唐音による悉曇学――文雄『悉曇字記訓蒙』を中心に――（上）（下）」（茨城大学人文学部紀要『人文学部論集』31・32，1998.3・1999.3）及び先に2項で紹介した同氏論は，江戸時代に於けるこの重要な課題にメスを入れたものとして注目される。なお，肥爪には「特集：日本語研究はどのように行われてきたか　悉曇学より日本語研究へ――連声をめぐって――」（『日本語学』17-7，1998.6）も有った。釘貫亨「「喉音三行弁」と近世仮名遣い論の展開」（『国語学』192，1998.3）は，中世以来五十音図で錯乱していたオ・ヲの所属をなぜ宣長において修正できたのかという興味有る問題に象徴させて，その背景を悉曇学からの音韻之学の独立と日本音韻学の韻鏡注釈からの独立という二度の学問自立化過程の必然の帰結であると説き，「学説史」の展開としてシャープに描き出している。これを氏の実践論と見れば，氏の総論は「日本語史の可能性と「国語史」」（『国語学』196，1999.3）であろうが，この論も史的研究の方向の提言として有意義である。

最後に，音韻史亦は其れを含む関係著書の書評として，山口佳紀「柳田征司著『室町時代語を通して見た日本語音韻史』」（『国語学』195，1998.12），高松政雄「沼本克明著『日本漢字音の歴史的研究――体系と表記をめぐって――』」（『国語学』195，1998.12），築島裕「馬渕和夫著『国語史叢考』」（『国語学』196，1999.3），早田輝洋「添田建治郎著『日本語アクセント史の諸問題』」（『国語学』197，1999.6），中井幸比古「秋永一枝ほか編『日本語アクセント史総合資料　研究篇』」（『国語学』199，1999.12）が出された。

5．総括

史的研究が「新しい事実の発見」の時代から，事実の確認の上に立って，「変遷の原理」の追究の時代に入った事は疑いない。音韻史の研究も又其の流れに在り，研究成果とし

ての「新しい事象（実）の発見」の論文は減少し，これまでの「研究成果の再検討」や「音韻の変遷の原理」を提示しようとする意欲に満ちたものが段々と多くなっている。それは音韻史研究の目的と方法が段々と明確化され始めたということであり，そういう研究が要求される時期に至ったという事でもあり，さらにはその準備が整った時期でもあるということが出来，本誌『国語学』が，「国語史研究の方向」という特集号を編んだ——編まざるを得なかった——のはその象徴的な出来事であったと言えるであろう。上記で取り上げた諸論の一々についての言及は省いたが，①音韻史研究が拠って立つ基盤となる「個々の事象の指摘＝記述的研究」に重点が置かれたもの，②より合理的説明を求めての「事象の再検討」に重点が置かれたもの，③事象の変遷を動的に捉える「変遷の原理の追究」に重点が置かれたもの，に色分けして見ることが可能である。この分野の全体の流れとして言えば，先にも言及したように①の研究が飽和に近づき，論文生産数は減少した様に見えるが，②③の研究が増加しつつあり，決して沈滞した分野では無いといえる。尚，紙幅の都合上，①に属すもので個別文献の記述研究の一部として音韻に触れられたものは此処では全て省略したことを断っておく。

以上，紙幅超過しながらも評者の力の限界があり繁簡よろしきを得ない言及になった事，亦重要な論を見落としているかもしれない事をお許し頂きたい。

——広島大学教授——